

釧路高専における国際交流活動と今後の展望

小松 正明*

The International Exchange Activities and the Future's Vision in Kushiro College

Masaaki KOMATSU

Abstract — National Institute of Technology, Kushiro College has established the Academic International Exchange Agreement with Turku University of Applied Sciences on November 28, 2011 and with King Mongkut's Institute of Technology Ladkrabang on August 28, 2013. These two agreements are to establish and develop teaching and research links between each Institute. Based on these agreements, Kushiro College had accepted 12 students from Finland and 18 students from Thailand since then. And we agreed to renew TUAS/KUSHIRO MOU and had signing ceremony at Kushiro College this year. This paper describes the result and evaluation for the International and the future's vision in Kushiro College.

Key words: International exchange Agreement, Turku University of Applied Sciences, King Mongkut's Institute of Technology, Cross-cultural understanding

1. はじめに

釧路工業高等専門学校（以下「釧路高専」という。）は、2011年11月28日、フィンランドのトゥルク市にあるトゥルク応用科学大学(TUAS: Turku University of Applied Sciences)と、学生や教職員の交流を柱とした国際交流協定を締結した^[1]。この協定に基づき、2012年4月に3名の男子学生、2013年4月に2名の女子交換留学生を受け入れ、3ヵ月の短期留学生生活を過ごした。2014年は0名の受入であったが、2015年は東北・北海道地区高専に14名の受入打診があり、釧路高専では、前年のTUAS派遣学生が4名であったため、同数の4名を受け入れ、2016年は3名の受入を行った^{[1][4]}。

一方、フィンランドへの交換留学生の派遣は2011年から開始し、昨年は4名の学生を派遣することができ、順調に派遣学生数が伸びていたが、2015年の派遣は2名に減少し、2016年は0名の派遣となった。

また、釧路高専は2013年8月28日、2校目の協定校としてタイのバンコク市にあるキングモンクット工科大学ラカバン校 (KMITL: King Mongkut's Institute of Technology Ladkrabang)と、学生交流に関する国際交流

協定(MOU)を締結した^[2]。

釧路高専は、2012年10月からキングモンクット工科大学と学生や教職員の相互交流の可能性について協議を行い、交流の詳細についての調整を開始し、2013年に交流協定を締結した。この交流協定に基づき、2013年5月に4名の男子学生、2014年には5名の男子学生、2015年には5名の男子学生、2016年は同様に4名の男子学生が1ヵ月の短期留学でタイから来釧した。



写真1 2016年フィンランドTUASからの受入留学生

* 釧路高専創造工学科



写真2 2016年タイKMITLからの留学生（前列中央は引率教員）

特に、例年、6月期はフィンランドからの短期留学生3名、タイからの短期留学生4名で、合計7名の海外短期留学生が釧路高専に滞在し、国費留学生、マレーシア政府派遣留学生等を合せて国際色豊かなキャンパスとなった^{[1][4]}。

キングモンクット工科大学への本校からの交換学生は2013年に専攻科生1名、2014年に本科5年生1名、2015年には専攻科1名の派遣の実績にとどまっていたが、2016年は4名の留学希望者に併せて、1週間の「短期研修プログラム」に初めて2名の応募があった。

本稿では、2011年から本格的に始まった釧路高専のこれまでの交換留学生受入・派遣成果について紹介するとともに、今後の国際交流事業の在り方について報告するものである。

2. 留学生受入プログラム

2.1 留学生受入実績について

これまでのフィンランド、タイとの年度別海外派遣・受入留学生の総数を表1示す。フィンランドからの学生受入は、28年度は東北・北海道地区で16名の

表1 年度別海外派遣・受入学生総数

	フィンランド		タイ	
	受入	派遣	受入	派遣
23年度	--	3(0)	--	--
24年度	3(0)	3(0)	--	--
25年度	2(2)	2(2)	4(0)	1(0)
26年度	0	4(1)	5(0)	1(1)
27年度	4(0)	2(1)	5(0)	1(0)
28年度	3(1)	0	4(0)	4+2
計	12(2)	14(4)	18(0)	7(1)+2

(注) カッコ内数字は女子学生数を示す

受入を行い、29年度においても16名の受入を打診されている。釧路高専は、このうち、交流協定で謳った4名の受入を行っており、29年度においても同数の4名を受け入れる予定である。タイからの学生受入は、28年度は4名の受入を行っており、29年度においては5名の受け入れを表明する予定である。

2.2 28年度受入学生

(1) フィンランド留学生

フィンランドからの3名の受入学生情報を以下に示す。

【1】 Ville Lahde (男) (ピラ)

所属学科: 機械生産工学科 (Mechanical and Production Engineering) 4年

《配属先》 機械工学科・赤堀研究室

【2】 Anita Kulesova (女) (アニタ)

所属学科: 情報・通信工学科 (Information and Communication Technology) 2年

《配属先》 情報工学科・林研究室

【4】 Tuomo Oravassari (男) (トゥオモ)

所属学科: 経営工学 (Industrial Management Engineering) 2年

《配属先》 電気工学科・小松研究室

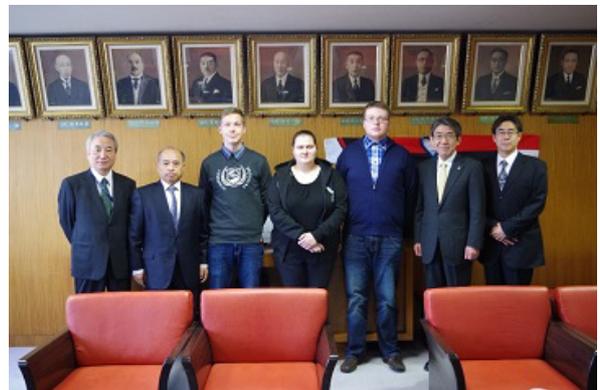


写真3 TUAS留学生の市長表敬訪問



写真4 配属研究室の留学生と本校学生

(2) タイ留学生

タイからの4名の受入学生情報を以下に示す。

【1】 Watana Chumpol (ニックネーム ; My)

専攻：電気エネルギー工学 3年

《配属学科》 電気工学科・小松研究室

【2】 Kitlerdornpairot Wichapas (ニックネーム ; Toon)

専攻：メカトロニクス工学 3年

《配属学科》 電気工学科・小松研究室

【3】 Saithong Maythichai (ニックネーム ; Pond)

専攻：電子工学科 3年

《配属学科》 電気工学科・小松研究室

【4】 Praymee Naruwat (ニックネーム ; Up)

専攻：建築学部 4年

《配属学科》 建築学科・栗原研究室

2. 3 主な活動実績

(1) 特別授業

このプログラムは、茶道、華道や書道などの日本文化紹介と、本校教員の専門分野や研究の紹介を教員及び学生のボランティアベースで行うもので、第1回の受入プログラム時に確立したものである。



写真5 タイ留学生4名の市長表敬訪問



写真6 タイ留学生4名のガイダンスの様子

本科、専攻科では英語で行われる授業がないため、日本文化の紹介と併せて、指導教員以外の本校教員の専門や研究を英語で紹介し、釧路高専での専門・研究などを理解することで、授業聴講に代わるものとしている。今年度は日本文化紹介のプログラムのみになった。

(2) 北大訪問プログラム

北海道大学・国際本部との間で、6月に札幌で開催されるソーラン祭りに合わせて北大を訪問し、北大の留学生との交流のほか、研究室やキャンパスツアーを行う「北大訪問プログラム」を提携している。これは、北大と釧路高専が結ぶ連携協定中の活動と位置づけ、岸波前釧路高専校長（現室蘭工業大学監事）のお骨折りにより、北大・国際本部との間で合意されたプログラムである。

本年度はフィンランド留学生3名、タイ留学生4名の計7名が参加した。本プログラムに、本校の学生も参加させる計画があったが、中間試験と重なり、また旅費予算の関係から実現しなかった。

本プログラムでは、北大の留学生や北大スタッフとの交流はもちろんであるが、北大大学院の研究室を見学することで、継続した日本への留学への意欲を引き出すことも目的としている。

(3) 本校学生との交流

受入学生の生活立上げのためのガイダンスや近隣生活圏の案内、釧路が持つ自然環境の紹介までは国際交流担当教職員の範囲であるが、それ以降の学校生活、寮生活は学生同士で進めるべきものである。この時、交流の輪を広げるのは、必ずしも指名されたチュータの力量だけではなく、その時の受入学生の性格や周りにいる学生の特質で決まる要素が大きい。これまでも、本校学生が受入学生との交流の輪を広げた実績は大きいものと考えている。また、彼らが帰国したあと、釧路高専から学生を派遣した時に現地で相談相手になってもらえるなどの頼りがいのある存在であり、また次の年にも交流が継続するなど、自然発生的なコミュニティの構成などにつながっている。



写真7 北大キャンパスツアー

2. 4 受入成果の評価

これまでの受入成果として、フィンランド学生1名が東北大学に、タイ学生1名が電気通信大学に1年間の長期留学で再来日を果たしている。TUASやKMITLの学生が釧路高専での研修・研究をとおして成長することはもちろんであるが、本校教職員や学生の意識変化も大きく、英語でのコミュニケーションの必要性を強く感じているようである^[3]。

3. TUASとの交流協定更新の調印

3. 1 交流協定 (MOU) 更新

本年度で5年目となるフィンランド・トゥルク応用科学大学とのMOU更新を行うため、トゥルク応用科学大学学長一行3名を本校に招聘し、交流協定の更新調印を行った。MOUは以下2種類について更新した。

- (1) トゥルク応用科学大学との学術交流に関する覚書
- (2) トゥルク応用科学大学との学生交流に関する覚書

3. 2 TUAS 代表団と訪問スケジュール

昨年11月にTUASを筆者が訪問し、交流協定更新の調印式を釧路高専で実施することを提案し、実現したものである^[3]。TUASからは学長以下、2名のスタッフが来釧した。以下、来校者及び調印関係スケジュールを以下に示す。

【1】 Vesa Taatila : TUAS 学長

【2】 Anne Norstrom : Chemical Engineering ユニット長

【3】 Janne Roslof : ICT ユニット長

【調印関係スケジュール】

—平成28年9月15日(木) : 釧路到着, 事前調整

—平成28年9月16日(金) : 調印式

10:00-10:30 市長表敬訪問

11:00-12:00 調印式

13:30-15:00 懇談

15:00-16:15 キャンパスツアー

—平成28年9月17日(土) : 阿寒湖視察, 離釧

3. 3 TUAS との懇談

TUAS 学長以下、代表団との懇談の機会を得た。懇談の場では、釧路高専の国際交流事業への取組み、TUAS とのこれまでの成果、受入学生の評価などを説明し、今後のTUAS との交流の在り方について協議した。懇談等から得た主な情報を以下に示す。

TUAS を含むフィンランドの応用科学大学は、フィンランドの一般大学との住み分けを明確化しつつあり、

Research から Practical Education, 企業との連携, ベンチャー創出に舵を切り替えたことがこれらの情報から推察することができる。

- ①4年前にTUASは会社組織に移行した。予算は80%が国からの出資だが、大学のオーナーはトゥルク市で、関係は複雑である。
- ②教員は皆、企業経験者であることを条件に採用しており、学長はBoardで選出される。
- ③TUASはResearchではなく、Practice Learningを目指す。(PBL)
- ④今回、釧路に来る前のISATE2016(@仙台)では、香港やタイの大学と有益な情報交換ができた。2020年はTUASでISATEを実施する予定。
- ⑤TUASでは大学発ベンチャービジネス(起業)を目指しており、特にICTを活用して病院等での医療関係のビジネスを目指す。ICT活用はフィンランドの特徴となりつつある。
- ⑥今後の日本の高専との関係としては共同研究や共同起業、など進めたいと考えている。できるところからのスタートとしては、現状の学生交流の活性化と次のステップとしての教員交流、具体的には日本人教員による授業等、出来るところから進めたい。



写真8 TUAS代表団を迎えた調印式



写真9 TUAS代表団との懇談の様子

4. 今後の国際交流事業の展望について

釧路高専の今後の国際化の加速・推進のための課題整理、提案を本章で行う。本内容は、文科省高等教育局から発信されている「KOSEN(高専)4.0イニシアティブ」で事業提案した事業と共通のものである。

4. 1 国際交流の拠点創り

海外から短期留学生を受け入れる場合、学内学生寮は空がなく、これまで王子製紙独身寮を借用しているが建物の老朽化が進み、閉鎖の可能性が高い。また、本校在校生との接点が少なく、留学生の存在を知らない学生がいる。

これらを解決するために、学内に短期留学生との交流の場、国際交流の拠点を新たに創る必要がある。具体的な提案としては、現行の鶴峰会館の2階を改修し、短期留学生が滞在できるようにし、また共有のコミュニティホールを設置して、留学生と在校生、教職員とがコミュニケーションができる空間を創造し、「国際交流会館」とするアイデアがある。

4. 2 教員の海外交流プログラム

海外協定校との教員の相互交流を活性化させるために、次の取組みを実施する。

- (1)海外協定校における英語による集中講義プログラムの開発。
- (2)海外協定校とプログラム内容の調整実施。
- (3)本プログラムのコアとなる対象教員を、外部機関からの支援を仰ぎ、養成する。
- (4)本プログラムの活性化を推進するために、海外協定校との共同研究を推進する。

学内においては、同時期に専攻科における英語授業の開講を目指し、外部機関から外国人講師による英語授業法のFDを企画・実施する。これにより、各分野最低2名の英語授業可能な教員を育成する。このためには、毎年、積極的に在外研究員を派遣して母数を増やす必要がある。



写真10 フィンランド留学生と筆者、阿寒湖にて

4. 3 学生の国際交流の活性化

フィンランド、タイ協定校との相互派遣・受入活性化が進まない理由として、留学を相談する場がない、留学の意義が見いだせない、などが挙げられ、低学年からの啓蒙活動が重要である。

5. おわりに

これまで、タイやシンガポールで見た学生は、国の近代化、急激な経済成長と併せてグローバル化の必要性をよく理解しており、特にシンガポールの学生には、日本人が忘れてしまった「勤勉」という言葉がよく当てはまる。また、東南アジアの潮流が、これまでの「吸収」(input)から「発信」(output)に大きく変わってきていることも実感でき、このままでは日本が取り残されるという危機感をずっと感じている。

とはいえ、これまでの国際交流推進の経験から、国際交流を通じた若手研究員の育成、学生の育成は、全体の底上げから目指すのではなく、まずモチベーションの高い人材を発掘し、背中を押してあげることから始まる、と考えている。学内には海外経験をしたこれらの人材によるフィードバックがかけられること、これらのスパイラル効果を狙うことが重要と考える。また、組織には国際交流をこなす実務部隊と、グローバル化全体を俯瞰できる企画部隊も必要である。

国際交流を媒介とした研究・教育に期待するものは、海外留学や在外研究をとおして、自分を見つめなおすこと、ターニングポイントとしての海外留学・研究であり、異文化包容力・寛容力の育成、フレキシビリティ、多様性の醸成である。

企業の製造現場(ハードウェア)が海外に移ってしまった現状で、今後日本が大切にしなければならないのはソフトウェアとしての人材であり、国際交流を媒介として育成する必要があるものと考え。

参考資料

- [1] 小松正明, 神谷昭基:「フィンランド・トゥルク応用科学大学交換留学生の第1回受入成果について」, 釧路工業高等専門学校紀要第46号, 2012年12月
- [2] 小松正明, 神谷昭基:「トゥルク応用科学大学およびキングモンクット工科大学からの交換留学生の受入成果について」, 釧路高専紀要第47号, 2013年12月
- [3] 小松正明:「留学生受入・派遣による国際交流事業と異文化理解」, 釧路高専紀要第48号, 2015年1月
- [4] 小松正明:「平成27年度留学生受入・派遣の成果と今後の国際交流事業について」, 釧路高専紀要第49号, 2016年1月